

更級への旅

芭蕉の「更級娘捨」来訪320年・その8

82

当地への松尾芭蕉の旅に、同行、お伴をした人がいます。芭蕉の門人の一人、越人です。北陸（越の国）の生まれなので越人（本名は越智十蔵）と呼び、名古屋で染物屋をしていたとされます。芭蕉より十数歳年下ですが、芭蕉の旅のきっかけには越人が大きいかかわっていたかも知れません。

▽動乱下での月見

芭蕉が更科の旅から江戸に戻ってまもなくまとめた「更科娘捨月之弁」（シリーズ前回81で紹介）の冒頭にその証拠となるものがあります。活字に起こしたものを下に掲載しました。書き出しの「あるひはしらら吹上ときくうちさそわわて」という文章に注目してください。

平家物語の「月見」に刺激されて

この言葉は平安時代の末期、貴族に代わって政権を握りながら滅亡した平家一族を描く「平家物語」の「月見」の章の中にある一節です。平家政権が対立勢力の源氏の攻勢を受け都を京から福原（神戸市兵庫区）に移したのですが、動乱の中でも平家の武者や女たちは戦争ばかりではなく、「中秋のころになつたのだから」と観月の名所をみんなで訪ねるといふ話が展開する場面です。この場面を芭蕉は当地に旅することになった動機として記しているのです。

「しらら」は石英砂のために白く見えることで知られる和歌山県白浜町の海岸。「吹上」は和歌山市西南の海辺の地区で、風が吹き上げるように吹いたことでこの名前があります。「あるひは」は「ある者は」の意味。ですから、この冒頭の部分は、中秋になつて平家一族のある者は、これらの月の名所に観月に行ったと平家物語が伝えているのを聞いて、私はさらしな・姨捨の月をみ

ないではいられなくなった、という表明です。

▽酔うと「平家」

更科への旅のエッセンスとも言える「更科娘捨月之弁」を芭蕉がなぜこの一節から書き始めたのか。越人が平家物語の謡いを得意にしていたからではないかと思っ

ています。そのことをうかがわせる資料が、芭蕉の文章に残っています。

更科への旅を終えて越人とともに江戸に戻って冬に書いた俳書の中で、越人のことを「性酒を好み酔和すると平家を謡う、これ我が友なり」と紹介しているのです。「二日勤めて二日遊び」とも記し、その明るい性格を芭蕉が気に入っていたこともうかがえます。

この越人とのコンビは更科紀行の内容にも影響しています。越人と同行することによって楽しい旅になったことを表現しているようにも思えるのです。木曾の道中では荷物を背負って腰が曲がった老僧と出会います。芭蕉はこの老僧と宿をともしします。夜、句を詠もうと思いますが、老僧がやたらと仏法の話をしてるので困惑します。しかし、芭蕉はそれも旅の風雅とみなし、楽しんでいる様子

がうかがえます。平家物語といえは木曾義仲のくだりがよく知られています。越人はこの場で義仲を謡って芭蕉を

謡いの名手だったお伴の越人



あるひはしらら吹上げときくうちさそわわて。ことし姨捨の月みむ事しきりなりければ。みののくによりいでやとおもひ立。木曾のあさぎぬの浅からぬ友。独したしき人の僕一人。かれ是、旅寝の力として。山路のうさもまぎらわし行に。道遠く日かずすくなければ。夜に出でてくれて駅につく。おもふにたがわず其夜、更科のさとに到る。山は八幡といふ里より一里計南にあたりて。西東によこをりふせて冷じう高くもあらず。かどかど敷岩などもみえず。ただ哀れふかき山の姿なりけらし。慰みかねしといひけむも理しられて。そぞろに悲しふにたへたり。何故に老たる人を捨つらんとおもふに。いとど涙落ちそひければ。俵は焼ひとり泣月の友。十六日坂木と伝処にて。いざよひもまだ更科の郡かな。貞享五年。

楽しめたかも知れません。▽琵琶も持参？

さて、ではなぜ芭蕉がそこまで「あるひはしらら吹上」に思い入れを抱いたのか。敗者への共感が



義仲、義経に限らず平家も含め滅んでいく武者たちを情感豊かに描く平家物語でしたので、そうした武者たちだつて動乱の中で名月を見ようとすると芸術心を持つていたことに学ぶべきものがあると考えたかも知れません。

死を前にした平家の人々だつて月を大事にしたのだから、戦乱のなくなった江戸時代の自分なら余計に名月を観賞しなければならぬ。その場所は信濃のさらしなの里・姨捨山ではないか。それにしても美濃の国（岐阜県）の出発（八月十一日）からわずか四日という強行軍の旅を私はなぜするのか。越人の謡いを聞きながら芭蕉はこんなことを確認し、また自問自答していたかも知れません。越人は平家物語を奏でる楽器の琵琶を持つて同行したかも知れません。

中央の絵は芭蕉の更科娘捨来訪三百二十年を記念した「まんが松尾芭蕉の更科紀行」（すずき大和著）の中で、越人が「月見」の章を謡っている場面。右が芭蕉です。左の写真は、芭蕉の来更二百五十年を機に越人を顕彰し、長楽寺境内に昭和十一年（一九三六）建立された石碑です。無名庵霞遊の出資揮毫だそうで、「越智越人随行塚」と刻まれています。

発行 二〇〇八年 十二月六日
編集 さらしな堂
（代表・大谷善邦）
〒三八九・〇八一三
長野県千曲市大字若宮一八四・六
（旧更級郡更級村）